

## ヒュームをヒューム主義によって検討する

---動機づけ理論における「欲求」の考察を中心に---

林 誓雄 (奈良女子大学)

序.

本報告では、ヒュームが示したと言われる人間心理に関する標準的な理解、すなわち「信念-欲求理論」においては、行為の動機づけの役割を割り当てられている「欲求」をどのようなものとして捉えるのがよいのか、探求する。

考察を進めるにあたって本報告は、メタ倫理学の知見に注目する。メタ倫理学の領域で行為の動機づけについて論じられるとき、「信念-欲求理論(ヒューム主義 Humeanism)<sup>1</sup>」がしばしば引き合いに出されており、この「信念-欲求理論」における信念と欲求双方の捉え方に関して、これまでのヒューム研究以上に掘り下げた議論が展開されている。それゆえ、メタ倫理学の知見を参考にすることで、ヒューム研究において考察すべき諸情念(そのうちの一つが今回取り上げる「欲求」であるが)についても、理解が深まることが期待される<sup>2</sup>。

今回の報告にあたり、近年のヒューム主義研究を調査したところ、「信念-欲求理論」における「欲求」の捉え方として、次のような可能性および方向性が見受けられた(次の表を参照<sup>3</sup>)。では、これら四つのうち、どれが「欲求」の捉え方として妥当であるのだろうか。

---

<sup>1</sup> 「ヒューム主義」は、(a)道徳的な行為の動機づけに関する「信念-欲求理論」という意味で用いられる場合と、(b)道徳判断の認知性に関する「非認知主義」を指す場合のどちらかであることがほとんどだが、その他にも(c)「実践理性に関する道具主義」を意味する場合(Millgram[1995])、「is-ought gap」を示す場合、さらには「ありとあらゆる「間」に注目し、そこにおいて垂直的な平均台を打ち立てるような「建設的哲学」の態度をとること」(中村[2008])と解される場合もある。本報告では一貫して、(a)の意味で「ヒューム主義」を用いる。

<sup>2</sup> なお本報告は、欲求の捉え方をめぐって、必ずしもヒュームのテキストとの整合性を追求するものではない。ヒュームの動機づけ理論を「信念-欲求理論」として考えるときに、相応しい欲求の捉え方を析出することが本報告の主目的である。報告者は、ヒューム情念論研究の進展を目指しているが、その進展が、ヒュームによる情念理解の限界を明らかにし、その限界を修正することによっても果たされうるという立場にたつ。

<sup>3</sup> それぞれの書誌情報は次の通り。Smith, M. [1994] *The Moral Problem*, Blackwell(*The Moral Problem* からの引用・参照は、原書と翻訳(『道徳の中心問題』榎 則章 監訳、ナカニシヤ出版、2006 年)の頁数を併記して示す); Barry, M. [2007] “Realism, Rational Action, and the Humean Theory of Motivation,” in *Ethical Theory and Moral Practice*, vol.10, No.3, pp.231-42; Barry [2010] “Humean Theories of Motivation,” in *Oxford Studies in Metaethics*, ed. by Shafer-Landau, R., Oxford University Press; Karlsson, M. M. [2006] “Reason, Passion, and the influencing Motives of Will,” in *Blackwell guide to Hume’s Treatise*, ed. by Traiger, S., Blackwell Publishing pp. 246-52; Sinhababu, N. [2009] “The Humean Theory of Motivation Reformed and Defended,” in *Philosophical Review*, Vol.118, No. 4, pp.465-500

表

| 「信念-欲求理論」<br>における欲求は、      | [B-1]<br>認知的状態(信念)によって<br>引き起こされる。 | [B-2]<br>認知的状態(信念)から<br>独立・先行して存在する。 |
|----------------------------|------------------------------------|--------------------------------------|
| [A-1]<br>命題的内容を持つ。         | ヒューム主義研究<br>M・スミス[1994]            | ヒューム主義研究<br>M・バリー[2007, 2010]        |
| [A-2]<br>快への欲/<br>苦に対する嫌悪。 | ヒューム研究<br>M・M・カールソン[2006]          | ヒューム主義研究<br>N・シンハバブ[2009]            |

### 1. 「信念-欲求理論」における欲求の捉え方

まず「信念-欲求理論」とはそもそもいかなる人間心理の捉え方なのか、ヒュームのテキスト箇所<sup>4</sup>を示しながら確認する。

ヒュームは人間精神に現れるものを「知覚 perception」と呼び、それを「印象 impression」と「観念 idea」の二つに分け、観念を印象のコピーだと説明する。このうち「観念」は理性が取り扱うものとされ、「信念 belief」もそのうちのひとつとされる。他方、「印象」に属するものとして「欲求 desire」が挙げられる。その他の細かい説明は省くが、「信念-欲求理論」を説明する上で重要な点は、第一に、**信念と欲求とは別種の存在だ**<sup>5</sup>ということである。信念とは、印象を表象(再現)する性質をもっており、それゆえ信念の内容は真偽の対象となるので理性的な批判を受けうる。これに対し、欲求とはそれ自体が原初的な存在であって、何かを表象するという性質を持たず、それゆえに真偽の対象とならないので理性的な批判を受けない<sup>6</sup>(T 2.3.3.5; SBN415, T 3.1.1.9; SBN458)。

第二に重要な点は、**信念には、それ自体に動機づけの力はなく、欲求の助けなくして行為を動機づけることはできない**ということである(ibid.)。

<sup>4</sup> ヒュームの主著『人間本性論 *A Treatise of Human Nature*』からの引用・参照は、Selby-Bigge 版(ed., by Selby-Bigge, L.A., 2nd Ed. Oxford Clarendon Press, 1978)、及び Norton 版(eds., by Norton, D. F. & Norton, M. J. 1<sup>st</sup> Ed., Oxford U. P., 2000)より行なう。略号として T を用い、初めに Norton 版の巻号、章番号、節番号及び段落番号をアラビア数字で順に付し、次に Selby-Bigge 版の頁数を付す。日本語訳は報告者によるものである。

<sup>5</sup> ボールドは報告者の強調。以下同様。

<sup>6</sup> この点についてマイケル・スミスは、信念と欲求とを別種のものと解釈しながらも、欲求は信念の要素を含むがゆえに、理性的・合理的批判の対象になりうるという議論を展開する。

ところで、「信念-欲求理論」の「欲求」に焦点を当てた研究が、それほど豊富にあるわけではない<sup>7</sup>。今回紹介・検討する先行研究も、それぞれが別の目的に向かって議論を進めながらも、その一環として「欲求」について掘り下げた考察を提示しているものである。では、それぞれの研究では、欲求がどのようなものとして捉えられているのか。上記の「信念-欲求理論」の二つの重要な点に関しては、すべての論者が意見を一致させているが、欲求の捉え方に関しては、次の二点で意見の相違が見られた。

[A] 第一に、**欲求の内容について解釈が異なっている**。

[A-1]メタ倫理学において「信念-欲求理論」が引き合いに出されるほとんどの場合、ある主体に欲求を帰属させるとき、「S は p を欲求する(S desire that p)」という形で述べられることが多く、その場合の p は文である<sup>8</sup>。この捉え方に従うと、欲求は命題的内容を持つものとして特徴づけられているので、これを**欲求の「命題主義的な捉え方」**と呼ぶことにする<sup>9</sup>。

[A-2]これに対し、**欲求を「快への欲/苦に対する嫌悪」として捉える**見解がある。そしてこの場合、**欲求は命題的内容を持たないものとして捉えられる**<sup>10</sup>。

[B] 第二に、**欲求と信念との関係に関して解釈が異なっている**。つまり、信念に欲求を引き起こす影響力を認める立場[これを B-1 とする]と、認めない立場[これを B-2 とする]の対立がある。

以上の[A]と[B]それぞれの主張を組み合わせることで、欲求の捉え方は先の二頁で示した四パターンに分類できるわけである。以下それぞれの捉え方について、検討していこう。

---

<sup>7</sup> なるほど、道徳的な行為の動機づけに関する判断の外在主義(以下「外在主義」と記す)は「信念-欲求理論」と相性がよく、それゆえ外在主義の提示する欲求の捉え方に着目するのが有用だと思われるかもしれない。だが、外在主義を主張する研究は、アモラリストの存在可能性の議論などをはじめ、判断の内在主義を退けることそれ自体に重きを置くため、欲求の捉え方についてほとんど考察をしない(例えば、Brink[1989]を参照)。例外的にラス・シェイファー＝ランダウが欲求についていくらか述べることもあるが、それは欲求がどのように行為者のうちに生み出されるかという「欲求生成の条件」を論じているのみであり、欲求の捉え方を考察するにあたっては参考にならない(Shafer-Landau[2000])。

<sup>8</sup> Smith[1994/2006]p.107/143 頁。例えば、動機づけをめぐる議論を取り扱う田村圭一は、「外在主義」について説明する文脈で、「ヒューム主義(信念-欲求理論)」と「外在主義」とを親和的なものとして捉えながら、(おそらくは)「信念-欲求理論」のモデルのもとで考えられた「欲求」の例として、「子供を虐待しない欲求」というものを挙げる(田村[2004]p.60)。この欲求は、**desire that p** の形で理解されている、つまり、命題主義的に捉えられているものと思われる。このように、「信念-欲求理論」における「欲求」は、命題的内容をもつものとして捉えられることが多い。

<sup>9</sup> **desire to do** という不定詞形で欲求に言及される場合も、その欲求を **desire that φ** という形にパラフレーズすることを認めるのであれば、不定詞形で言われる欲求も命題主義的に捉えられていると考えられる。

<sup>10</sup> これらの他に、例えばデイヴィドソンのように、欲求を「賛成的態度 **pro-attitude**」として捉えるやり方もあるだろう(Davidson[1980/1990]pp.3-4/3 頁)。だが今回調査した限り、デイヴィドソン流の捉え方は見受けられなかったので、「賛成的態度」の捉え方の検討は今後の課題にすることとした。

## 2. 命題主義的な捉え方

まずはマイケル・スミスの議論を取り上げる。スミスは著書 *The Moral Problem* において、倫理学が扱う「行為の理由」を「動機づけ理由(motivating reasons)」と「規範理由(Normative reasons)」とに分け、前者については「ヒューム主義(信念-欲求理論)」をとる<sup>11</sup>が、後者については「反ヒューム主義」をとる<sup>12</sup>。注目したいのは、「動機づけ理由」について検討する過程でなされる、欲求に関する掘り下げた考察である。

スミスはまず、ヒューム自身の欲求の捉え方について検討し、これを「強い現象論的な捉え方」<sup>13</sup>として位置づけた上で退ける。これを退ける理由は、[1]欲求の本質が現象論的性質を持つことのみで帰されているために、自分の欲求を誤認する<sup>14</sup>という事態を説明できない点、および[2]欲求が命題的内容を持つことを説明できない点<sup>15</sup>が問題となるからだという(Smith[1994/2006] p.107/143 頁)。

そこでスミスは、「ヒューム主義」の枠組み、すなわち「信念-欲求理論」については維持しつつも、欲求については、それを「一定の条件下で一定の仕方で行為する傾向性(disposition)」として捉えるという理解を打ち出す<sup>16</sup>。このときスミスは、上記の[1]欲求の誤認の可能性ということ以上に、[2]欲求が命題的内容を持つということ、欲求理解にとってより重要なことだと主張している。それゆえスミス流の理解を、**欲求の「命題主義的な捉え方」**として特徴づけることができるだろう。

---

<sup>11</sup> スミスが「ヒューム主義」を支持する理由は以下の通りである。すなわち、「行為の理由による説明は目的論的な説明である」という前提が真であるなら、主体が何らかの目的を持つことは欲求を持つことと同義であり、それゆえ欲求が動機づけ理由の構成要素でなければならないとする「ヒューム主義」によってのみ、動機づけ理由を目的の追求として理解することが可能になるからである(Smith[1994/2006]p.138, 154-5 頁)。

<sup>12</sup> ここで言われる「反ヒューム主義」は、「ヒューム主義(信念-欲求理論)」を採らないことではない。

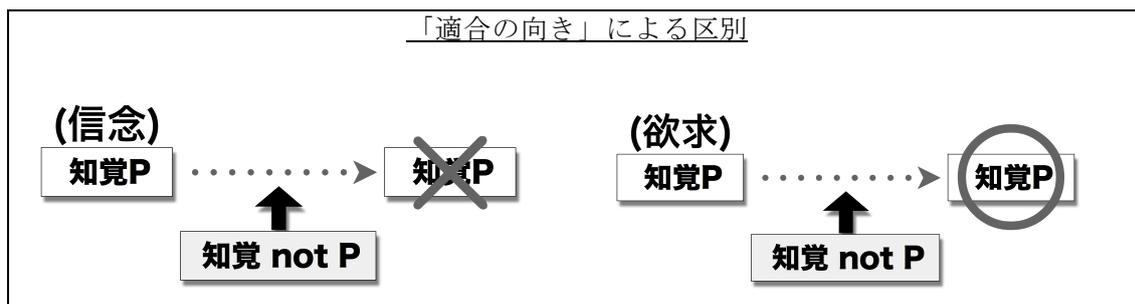
<sup>13</sup> 「欲求は刺激感覚と同様に、まったく本質的に一定の現象的内容を持つ状態にほかならないという見解」と説明される。具体的には、私が欲求を持っているとき、私は身体的な刺激感覚に似た心理的感覚を持っている。そして、欲求とはそのような感覚のみによって知られるという捉え方のことである(Smith[1994/2006]p.105/140 頁)。

<sup>14</sup> 他の言い方をすれば、「私はφしたい」という欲求の命題文は、それが行為として発現する時点における現象論的な現れ方とは別に、その後の時点になって真偽が分かるものになるということである。「私は音楽家になりたい」という欲求が、母が死んだのち、それが本当は偽であったことが分かる男の例をスミスはあげている(Smith[1994/2006]pp.106-7/142 頁)。

<sup>15</sup> しかしながら驚くべきことに、欲求が命題的内容を持つ点について、スミスはマーク・プラッツの議論を踏襲するのみで、その妥当性については検討がなされていない(Cf. Platts[1979] p.76)。

<sup>16</sup> 詳しく述べれば、 $\phi$  <sup>フアイ</sup>したいと欲求することは、条件 C においては  $\phi$  <sup>フサイ</sup>を行なう傾向性、条件 C' においては  $\chi$  <sup>カイ</sup>を行なう傾向性などの、様々な傾向性の集合を持つことであり、しかも条件 C や C' が成り立つためには、主体はなによりもまず、当の欲求とは異なる一定の他の欲求と、さらに目的-手段に関する一定の信念を持ち合わせていなければならない、という捉え方である(Smith[1994/2006]p.113/151 頁)。

かくして、欲求を傾向性として捉え直すことで、(1)欲求の誤認可能性、および(2)欲求が信念の要素を含んでいることをも説明できるようになるという。ここで言われる「欲求が信念の要素を含む」とは、スミスにおいては「欲求が命題的内容をもつ」ということであると考えられる<sup>17</sup>。ところで、欲求が信念の要素を含むとする第二の点を認めると、**欲求と信念との違いが不明瞭になる**という重大な懸念が生じる。しかし、スミスによれば、欲求と信念にはそれぞれに異なる「**適合の向き(directions of fit)**」があると考えられることで、それらの区別が可能になる。スミスの説明によると、「p でない」という内容を持った知覚が現れた場合、「p である」という信念は存在しなくなる傾向がある。これに対し、「p である」ことへの欲求は、欲求している状態にある主体を p の実現に向かわせながら存在し続ける傾向がある。これが「適合の向き」の考え方である。「適合の向き」の違いによって信念と欲求とを見分けることで、上記の懸念は払拭されることになる(Smith[1994/2006] p.115/153 頁)。

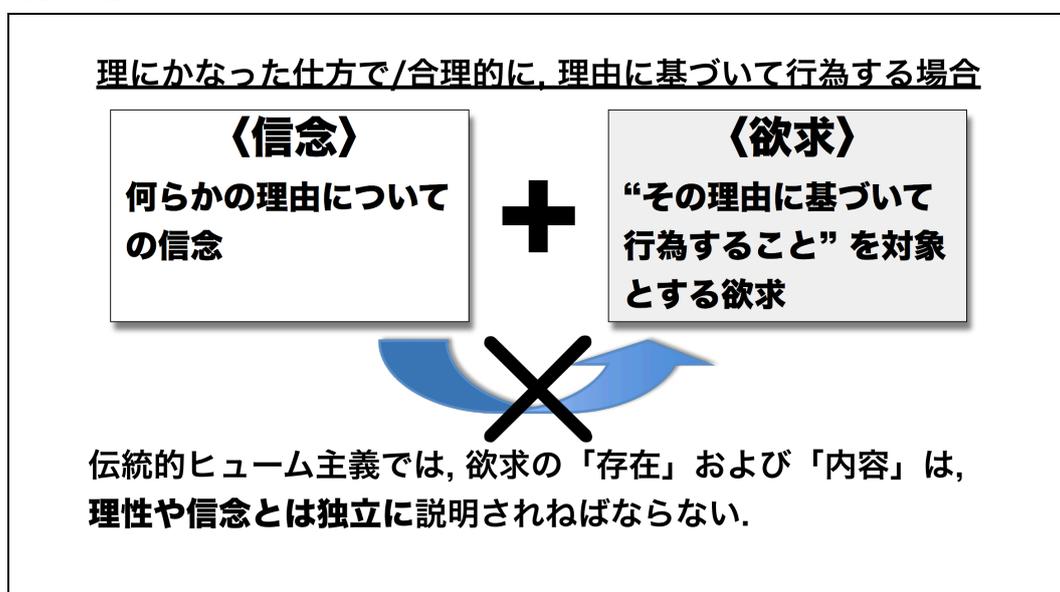


## 2.1 伝統的ヒューム主義理論における欲求理解とその検討

欲求を命題主義的に捉えながらも、さらなる違いを見せる研究として、本報告ではメリッサ・バリー[2007/2010]とスミス[1994]を取り上げる。バリーの議論の中で紹介される「伝統的ヒューム主義理論」において、**欲求は、理性や信念とは無関係に由来し、先行して存在する心的状態**として特徴づけられる(Barry[2010]pp.196-7)。

<sup>17</sup> そもそも「欲求が信念の要素を含む」とは、スミスが引いてくるプラッツの指摘である。プラッツが「欲求が信念の要素を含む」ということで意味していることは、欲求が信念の「適合の向き(心的状態→世界)」を持つということであった(Smith[1994/2006]p.112/149-50 頁)。だが、スミスがその後「欲求が信念の要素を含む」と述べる箇所では、「p である」という信念と「p である」という欲求との違いを「適合の向き」によって説明している(Smith[1994/2006]p.115/153 頁)。それゆえ、スミス自身の説明においては、「欲求が信念の要素を含む」とは「欲求が命題的内容をもつ」を意味していると考えられる。

欲求をこのように捉える「伝統的ヒューム主義」に対して、バリーは「合理的な行為 (rational action)」<sup>18</sup>を適切に説明できないという問題点を指摘する。バリーによれば、ヒューム主義においては〈何らかの理由についての信念 A〉<sup>19</sup>が合理的な行為を動機づけるのであれば、〈その信念 A〉は、〈理性や信念とは無関係に生じる何らかの欲求〉と結びつくことによって、その行為を動機づけねばならない。ところで、〈その信念 A〉は、行為を動機づける様々な欲求と結びつく可能性があるのだけれど、理にかなったやり方で信念に基づいて行為することができるために、〈行為を動機づける際に不可欠な欲求〉は、〈その理由に基づいて行為すること〉を対象とする欲求でなければならない。そうすると、行為者の諸欲求の中には、〈その理由に基づいて行為すること〉を対象とする欲求なるものがあるはずであり、〈その信念 A〉は、この欲求と結びつくことによって始めて、合理的な行為を動機づけるということが可能になる。しかしながら「伝統的ヒューム主義理論」においては、〈“その理由に基づいて行為すること”を対象とする欲求〉の存在、およびその内容は両方ともに、理性や信念の因果的/直接的影響以外の何ものかによって説明されなければならない。だが、このような説明は、どのようにしても妥当な仕方では行なわれない (Barry[2010]p.206)。



<sup>18</sup> ここでバリーが持ち出す「合理的な行為」とは、次のように説明される。すなわち、合理的に行為するとき、行為者は、自身がそうする理由を持つところのものについての信念を踏まえて行為することを引き受けている。例えば、禁煙することで寿命が延びることが行為の理由を与えるということを認識している限り、行為者の行為はその動機づけにおいて合理的と見なされることになる (Barry[2007] p.232)。

<sup>19</sup> 〈 〉 やまカッコは、理解を容易にするために筆者が挿入したものである。以下同様。

## 2.2 マイケル・スミスの欲求理解とその検討

スミスの欲求の捉え方がバリーの描く「伝統的ヒューム主義」と異なっているのは、信念に、それに対応した欲求を引き起こす力を認める点である(Smith[1994/2006]p.180/243 頁)。



このスミスの欲求の捉え方は、「伝統的ヒューム主義理論」に対してバリーが指摘した困難を克服するので、「伝統的ヒューム主義理論」よりも妥当であるように見える。だが、またもやバリーによって、別の問題点が指摘される。

バリーによれば、理由に基づく行為の「説明」の際に訴えられる欲求は、スミスの場合、それとペアになる信念に過大に依存することになる。それは逆に、欲求が説明上の役割をほとんど担わなくなることを意味するという。すなわち、信念が欲求の原因となり、しかも信念によって欲求の「存在」およびその「内容」まで定められてしまうと、欲求は、行為を説明する場面において不要なものになってしまうというのである (Barry[2010] pp.211-2)<sup>20</sup>。

## 2.3 命題主義的な欲求の捉え方の致命的な難点

こうしたバリーによる「ヒューム主義」批判は、一見して分かる通り、まったく説得的ではない。第一に、バリーは「合理的な行為」について妥当な仕方で説明しえないことを理由に「伝統的ヒューム主義理論」を退けている。だが、「合理的な行為」を説明するための要件として挙げられている条件、すなわち「理にかなったやり方で信念に基づいて行為することができるために、〈行為を動機づける際に不可欠な欲求〉は、〈その理由に基づいて行為すること〉を対象とする欲求」でなければならない」という条件は、そのものの妥当性がまったく論じられていないので、不当と考えられる。第二に、スミスに対する批判だが、信念が欲求の「存在」と「内容」を定めてしまうがゆえに、行為を説明する場面で欲求が不要になってしまうとの指摘だが、これも誤りである。スミス流の欲求の捉え方を採

<sup>20</sup> こうしてバリーは、「伝統的ヒューム主義理論」と、その改良版としての「スミス流の信念-欲求理論」の両方を、妥当性を欠くものとして退けた上で、動機づけの議論を「反ヒューム主義」へ持っていこうとする。

用すれば、行為を説明するときに、信念の果たす役割が大きくなることは認めるとしても、だからといって欲求が行為を説明する上で不要になることはない。「ヒューム主義」において何よりも重要なのは、信念単独では行為を動機づけることができず、行為の動機づけを説明するためには欲求に言及せざるを得ないということであった。この点を無視した上で、スミスの捉え方では欲求の存在意義が失われると批判するのは不当であろう。そもそも、スミスにおいて「理由に基づく行為」というものを扱うのは「規範理由」を説明する文脈においてである。しかし、バリーが「理由に基づく行為」を説明する上で妥当性を欠くとして批判の矛先を向けているのは「動機づけ理由」を論じる箇所なのである。スミスが設けた「動機づけ理由」と「規範理由」との重要な区分を無視している点でも、バリーの批判は的はずししていると言わざるを得ない。

では、「伝統的ヒューム主義理論」とスミス流の欲求の捉え方は、両方共に「信念-欲求理論」における欲求の捉え方として妥当なのだろうか。本報告はこの問いに「否」と答える。というのも、両方の見解が共に前提としている点、すなわち欲求を命題主義的に捉える点が、重要な意味で妥当性を欠くと考えられるからである。それは、とりわけ**スミスにおいて命題主義的な捉え方を支えている「適合の向き」という考え方が、うまく機能しないことが明らかになることによって示される**(Sobel, D. & Copp, D. [2001], Coleman, M. C. [2008] etc.)。このうち、簡明な「適合の向き」批判と思われるデイヴィッド・ソーベルとデイヴィッド・コップの議論を紹介しよう。

スミスの「適合の向き」の説明では、「p でない」という内容を持った知覚が現れるとしても、「p である」という知覚が存在し続ける傾向を持つのであれば、その知覚は「欲求」と認定されるのであった(Smith[1994/2006] p115/153 頁)。しかし、ソーベル&コップによれば、「存在しなくなる傾向」をもつような欲求は存在しうるのだという。例えば、スーという人物は自分が <sup>フォーティナイナーズ</sup>49ers の熱烈なファンであると言っている。そして、スーは 49ers が試合に勝って欲しいと思っている。ところで、彼女がどのチームを応援するかは、チームそれぞれの直近の勝ち負けに応じてコロコロ変わるので、49ers が試合に勝たなくなることで、先のスーの**欲求は存在しなくなる傾向をもつと言える**(Sobel&Copp[2001]p.48)。

このように、欲求に関して<sup>21</sup>、スミスの「適合の向き」の説明について反例が見つかる

<sup>21</sup> もちろんソーベル&コップの議論の中では、スミス流の「信念」の捉え方についても反例が提示されている。彼らによると、「頑な信念」や「必然的真理に関する信念」などの事例においては、「適合の向き」という考え方が妥当性を欠いていることが示されるという。例えば、雨が降らないとフレッドは確信して

のであれば、「適合の向き」の考え方がうまく機能していないと言えるだろう<sup>22</sup>。「適合の向き」の考え方がうまく機能しない場合、欲求の「命題主義的な捉え方」は、**信念と欲求との違いを不明瞭にしてしまう**という致命的な難点を抱えこむことになる。スミスにおいてはこの難点を克服しない限り、「信念と欲求とは別個の存在である」という「信念-欲求理論」の重要な根幹を維持することが難しくなると考えられる。このことは、ともしれば「信念-欲求理論(ヒューム主義)」それ自体が間違っているという結論を導くことに繋がるであろう。そしてその結果、メタ倫理学における動機づけの議論を「反ヒューム主義」へと傾かせる流れに棹さすことにもなりかねない<sup>23</sup>。

そこで、このような「反ヒューム主義」への流れを食い止めて「ヒューム主義」を維持するためには、欲求の「命題主義的な捉え方」をあきらめて、別の欲求の捉え方を示すことで、新たな「信念-欲求理論」の枠組みを考えねばならない。では、別の欲求の捉え方としてどのようなものがありうるだろうか。

### 3. 快樂主義的な捉え方

「信念-欲求理論」において、命題主義的な捉え方とは異なる欲求理解を提示するものとして本報告が目指すのは、マイケル・カールソンとネイル・シンハバブの議論である。彼らは、欲求を「快への欲<sup>24</sup>」「苦に対する嫌悪」として捉えることを提案する(この捉え方を以下では「快樂主義的な捉え方」と表記する)。ただし彼らは、快樂主義的な捉え方という大枠については一致する一方で、欲求を、信念に独立・先行して存在するものとして捉えるか、

---

いるとしよう。ところがフレッドは大量の真っ黒な雲が近づいてくるのを見て、雨が降りそうだと言うことに同意するとする。しかし、現象が、持っていた確信に反していることを認めるとしても、フレッドが自分の主張に自信を持ち続けることはありうることである。このときフレッドが、自分が信じていると考えているものを信じておらず、むしろ単に自分の主張が真であって欲しいと望んでいるに過ぎない、ということにはならないだろう。別の例を出せば、ジムは $2+2=4$ であると確信している。そして、この確信を弱体化させる傾向をもつような新たに現れる認知的状態など存在しない。しかし、not P という知覚が存在しないからといって、ジムが $2+2=4$ を信じていない、つまり $2+2=4$ というジムの信念は信念ではないことにはならないだろう(Sobel&Copp[2001]pp.47-8)。

<sup>22</sup> ソーベル&コップの議論を継承しながら、スミスの「適合の向き」をさらに綿密に批判したものとして、Coleman[2008]を参照せよ。

<sup>23</sup> スミスが擁護する「信念-欲求理論」を批判することで、反ヒューム主義の優位を示そうとする論考は数多く見られる。例えば、G・F・シェーラーは、スミスの「信念-欲求理論」では、信念と欲求が「適切に関係づけられて」いなければならないと、それらが「動機づけ理由」を構成するために、行為者はそれら一組の信念と欲求をひとまとめにしなければならないとする。しかし、この「ひとまとめにしなければならない」という点は、行為者が自分の欲求に気がついていなければならないことを含意するが、それでは「欲求の誤認可能性」と矛盾するがゆえに、「ヒューム主義」は退けられるべきと論じる(Schueler [2009])。

<sup>24</sup> 原語は desire だが、「信念-欲求理論」で捉えられるものとしての「欲求」との区別をつけるために、「欲」と表記する。

それとも欲求を、信念によって引き起こされうるものとして捉えるかという点では異なっている。前者の見解を採るのがシンハバブであり、後者がカールソンである(以下の図を参照)。まず、カールソンの見解を確認し、その見解の妥当性を検討する形で、シンハバブの見解について考察することにしたい。

### 3.1 カールソンの捉え方

カールソンは、「あるものが快を持ち合わせている」ということの信念と、「ある仕方で行うことによってこの快が実現されるかもしれない」ということの信念によって、その快を求めようとする欲求が引き起こされ、この欲求によって行為が動機づけられるという枠組みを提示する(Karlsson[2006]p.249)。本報告は、この枠組みを支持する。

### 3.2 シンハバブからの異論とその検討

シンハバブはカールソンと同様に、欲求を「快への欲」および「苦に対する嫌悪」として捉える(Sinhababu[2009]pp.469-70)。だがシンハバブは、欲求が信念などの認知的状態によって引き起こされるものだとする点については断固反対し、認知的状態が抱かれる前に、すでに行為者のうちに可感的な仕方であれ潜在的な仕方であれ、欲求は存在していなければならないと主張する。欲求とは、実践的推理を行なうにあたって必要不可欠となる前提条件であり、仮に欲求が、推理を通じて変えられてしまうのであれば、理性は情念の奴隷というよりもむしろ、情念の主人になってしまうので、ヒューム解釈としてもヒューム主義解釈としても妥当性を欠く、そうシンハバブは主張する(Sinhababu[2009]pp.465-6)。

なるほど、カールソンのように、信念によって欲求が引き起こされることを認める解釈においては、行為の説明において信念の果たす役割が大きくなることは認められるである

う。しかしながら、依然として信念が単独で行為を動機づけることは否定され続けている、つまり**信念が行為を動機づける際には、必ず欲求が伴われねばならないという「ヒューム主義」の重要な点は維持されている**。従って、信念が欲求を引き起こしうることを認めるとしても、理性が情念の主人になるとまでは言えないであろう。

逆にシンハバブのように、欲求に対する信念の影響を一切認めない場合、**われわれが何かを認知したり信じたりすることによって、欲求が消滅するという現象を説明できない点が問題になると**考えられる。信念によって欲求が消滅する現象について、いみじくもヒュームが次のような例を挙げている。すなわち、「ある人は、ある果物には卓越した旨味があると思っ、それを欲求することがあるだろうけれど、それが間違いだと確信するときはいつでも、その人の切望は消え失せる(T 2.3.3.7; SBN416-7)。」この事例に見られる現象は、われわれの直観に合致していると言える。だが、シンハバブの主張は、「いかなる認知的状態も欲求を変えることはできない」というものであるから、この現象を説明することができない。かくして、欲求が信念によって引き起こされたり消滅させられたりするという点を認めるカールソンの方が、欲求の妥当な捉え方であると考えられるのである。

結.

これまでの議論をまとめて結びに代えたい。本報告では、メタ倫理学上で展開されている諸議論を参考にすることで、「信念-欲求理論(ヒューム主義)」を維持する際に、その理論にとって相応しい「欲求」の捉え方とはどのようなものであるのか、探求してきた。

前半で検討した、欲求の「命題主義的な捉え方」は、それを支えている「適合の向き」という考え方がうまく機能しないと考えられるので、妥当性を欠いた捉え方であると本報告は結論づけた<sup>25</sup>。というのも、「適合の向き」の考え方が機能しないと、「命題主義的な捉え方」は信念と欲求の違いを不明瞭にするという難点を抱えこむことになり、この難点は「信念-欲求理論(ヒューム主義)」を維持する上で致命傷になると考えられるからである。

---

<sup>25</sup> もちろん、本報告で確認した諸批判は、現時点ではスミスの「適合の向き」の考え方にのみ当てはまるものである。スミスの「適合の向き」の考え方は、そのアイディアの祖とされるアンスコム(Anscombe [1957])やアンスコムを受け継ぐサール(Searle[1979])のものとは異なる可能性があり、彼女らの「適合の向き」の考え方については、改めて検討する必要があるだろう。そしてまたアンスコム、サール、スミスとはまた異なる「適合の向き」の考え方が存在する可能性もあり、それらについても検討が必要であろう。これらの検討は、今後の課題としたい。

そこで、あくまでも「信念-欲求理論(ヒューム主義)」の維持を目指す本報告は、欲求の別の捉え方を探求し、「快への欲」および「苦に対する嫌悪」として捉える解釈を検討した。この捉え方の更なる違いとして論点となったのは、欲求に対する信念の影響を認めるか否かという点であったが、本報告は、欲求に対する信念の影響を認めるカールソンの解釈を支持した。その理由は、信念に欲求を引き起こす力を認めるとしても行為の動機づけにおける欲求の存在意義が失われることにはならないし、むしろ欲求に対する信念の影響を認める方が、信念によって欲求が消え去ることがあるというわれわれの直観に合致する現象を説明できるために、有利と考えられたからである。

以上の考察により本報告は、「信念-欲求理論」における欲求の捉え方として、カールソン流の解釈を採用する道筋を得た。それでは、この捉え方はどこまで妥当性を維持しうるのだろうか。その検討が今後の課題となる。

#### 今回の報告を通じて浮かび上がった意義や課題など

##### ◆ ヒュームをヒューム主義から検討して、何がどう嬉しかったのか？

⇒ 今後ヒュームの情念論研究を進める上で、欲求およびそれに類する直接情念(善意 *benevolence* も?)については、「少なくとも信念-欲求理論的枠組みで行為の動機づけを捉えようとするのであれば、直接情念を、命題主義的に捉えるのは避けた方がよい」という方向性が得られた。

⇒ ヒュームの動機づけ理論を「判断の外在主義」(林[2009]で提示)として解釈することの妥当性を再確認できた。

##### ◆ 今回たどり着いた結果(カールソン流の捉え方)により、ヒューム思想は現代メタ倫理学においてどのような意義を持つのか？

⇒ スミスのヒューム主義(そして欲求を命題主義的に捉える仕方)への各種批判によって潰されかけていた「信念-欲求理論」を救済し、反ヒューム主義へ傾くような流れを、ヒューム主義側へと引き戻すことに寄与する(さらに、内在主義への傾きを、外在主義の方へ持ってくる足がかりとなりうる???)。

##### ◇ 今回のカールソン流「信念-欲求理論」は、実践理性とどのように関連しうるか？

⇒ 通常、ヒューム主義的「実践理性」とは、ある目的に対する手段を提示したり、その関係を把握したりする能力として考えられている。本報告の結論を踏まえて再構成すれば、実践理性とは、「欲/嫌悪」の対象である「快/苦」を目的としたときの手段を提示したり、その関係を把握したりするものとして(のみ?)特徴付ける(特徴付け直す?)ことができる。だが、この実践理性はいわゆるカント的な「実践理性」とはほど遠いものであろう。。。

## 参考文献

- ・ Anscombe, G. E. M. [1957] *Intention*, Ithaca, NY: Cornell University Press (菅豊彦訳『インテンション：実践知の考察』産業図書、1984 年)
- ・ Barry, M. [2007] “Realism, Rational Action, and the Humean Theory of Motivation,” in *Ethical Theory and Moral Practice*, vol.10, No.3, pp.231-42
- ・ ——— [2010] “Humean Theories of Motivation,” in *Oxford Studies in Metaethics*, ed. by Shafer-Landau, R., Oxford University Press
- ・ Brink, D. [1989] *Moral realism and the foundations of ethics*, Cambridge University Press
- ・ Cohon, R. [2008] *Hume’s Morality: Feeling and Fabrication*, Oxford U. P.
- ・ Coleman, M. C. [2008] “Directions of Fit and The Humean Theory of Motivation,” in *Australasian Journal of Philosophy*, Vol.86, No.1, pp.127-39
- ・ Davidson, D. [1980] *Essays on Actions and Events*, Oxford U. P. (服部裕幸、柴田正良訳『行為と出来事』勁草書房、1990 年)
- ・ 林 誓雄 [2009] 「ヒュームにおける道德感情と道德的な行為の動機づけ」『倫理学年報』第 58 号、日本倫理学会、pp.93-107
- ・ Hume, D. [1739-40] *A Treatise of Human Nature*, ed. by Selby-Bigge, L.A., 2nd Ed Oxford Clarendon Press, 1978; eds., by Norton, D. F. & Norton, M. J. 1st Ed, Oxford U. P., 2000 (大槻春彦訳、『人性論』1-4 巻、岩波文庫、1948-1952 年)
- ・ Karlsson, M. M. [2006] “Reason, Passion, and the influencing Motives of Will,” in *Blackwell guide to Hume’s Treatise*, ed. by Traiger, S., Blackwell Publishing pp. 246-52
- ・ Millgram, E. [1995] “Was Hume a Humean?,” in *Hume Studies*, Vol.XXI, No. 1, pp.75-93
- ・ 中村 隆文 [2008] 「ヒューム主義であるとはどのようなことか？」『千葉大学人文社会学研究』No.17, pp.1-17, 千葉大学大学院人文社会学研究科
- ・ 奥田 太郎 [2009] 「現代倫理学における「ヒューム主義」の系譜と起源」イギリス哲学会関西西部会報告(未刊行)
- ・ Platts, M. [1979] “Moral reality and the end of desire,” in Platts, M. ed., *Reference, Truth and Reality*, London: Routledge and Kegan Paul p.76
- ・ Schueler, G. F. [2009] “The Humean Theory of Motivation Rejected,” in *Philosophy and Phenomenological Research*, LXXVIII, No.1, pp.103-22
- ・ Searle, J. R. [1979] *Expression and Meaning*, Cambridge U. P.(山田友幸監訳『表現と意味』

誠信書房、2006 年)

- ・ Shafer-Landau, R. [2000] “A Defense of Motivational Externalism,” in *Philosophical Studies*, 97(3): 267-291, Kluwer Academic Publisher
- ・ Sinhababu, N. [2009] “The Humean Theory of Motivation Reformed and Defended,” in *Philosophical Review*, Vol.118, No. 4, pp.465-500
- ・ Smith, M. [1994] *The Moral Problem*, Blackwell(檜 則章監訳『道徳の中心問題』ナカニシヤ出版、2006 年)
- ・ Sobel, D. & Copp, D. [2001] “Against Direction of Fit Accounts of Belief and Desire,” in *Analysis*, Vol.61, pp. 44-53
- ・ 田村 圭一 [2004] 「道徳的な実在論と道徳的な動機づけ」『思想』5 月号、岩波書店、pp.59-74